

## コンケン大学での居候生活 (18)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

本報では特別講演として学部生、院生向けに1時間ほどの話をして欲しいとの要請を受けた。長引くコロナ禍で集会や対面講義は難しいので、ズームを使ったヴァーチャル方式として欲しいと言う条件が付いている。本来4月の10日あたりから15日までは、タイでも恒例のソンクラ祭り（水掛祭り）が実施され、チェンマイ大学では各学部、大学を挙げて指向をこらした衣装をまとい、決められた通りを3～4キロほどを行進するのが例年の習わしになっており、筆者は欠かすこと無く参加してきた。ここコンケンでは残念ながら、コロナ禍でそうしたパレードは今年はキャンセルとなり、その代わりに1週間ほどの長期の休暇と言うことになった。不要不急の外出、県境を跨いだ旅行など、できるだけ密を避け、可能な限り自宅待機に近い形での対応が要請されている。筆者には4月16、17日の両日上記の学生・院生向けにそれぞれ1時間ほど特別講義をして欲しい旨、要請がなされた。毎日を不自由に感じる状況の下で、有り難い話として応諾した。もちろん言うまでも無く、断る理由もないし雇用契約の中にこの事案も当然含まれており、いずれにしても応諾する結論に落ち着く事になったが、大勢の学生、院生を前に久しく講義はして居ないから、まさに天から降ってきた有り難い話である。4日程掛けてPPT資料を整理し準備は整ったので事務担当に送付したが、返答はない。直ぐに返答が来ないのがタイの文化(?)である。資料を受け取ったと言う連絡もない。おそらく休暇中と言う事もあり、敢えて返答しないのか、その辺は理解や判断をしかねるが、現実はこのようである。受けた要請の内容は以下の様である。

### < Special talks in the course >

#### 1. Work Preparation and Continuing Self-Development

<https://kku-th.zoom.us/j/99568010479>

Date and Time: 1 PM on April 16, 2021

#### 2. Engineering Research Methodology

<https://kku-th.zoom.us/j/95377898530?pwd=clNXUm1GRFZHWHZVRE0rdEYyU0xiQT09>

Meeting

ID: 953 7789 8530

Passcode: l3TWFsx5Fm

Date and Time: 1 PM on April 17, 2021

学部生に対する講義のタイトルは学生の「仕事の準備と継続的自己啓発」というものであ

るが、上記の様に準備を整えて資料も事前に届けていても反応はない。タイの大学では何処の大学の事務関係スタッフも 50 歩 100 歩で大きな差は無いと考えた方が良い。しかし確かに講演するのは筆者であるが、そうした特別講義実施の情報アナウンスが該当の学生、院生に成されているかどうか分からないのでは不安である。問題は企画された特別講義のイベントが対象学生に対して成功裏に終えることができなければ意味はない。此処で言う成功裏とは講演者である筆者に取ってと言うよりも、聴講する学生にとってと言う意味である。連絡やアナウンスが成されておらず、多くの学生が参加の機会を逃したというのでは元も子もない。そうした事への注意は果たして払われているのか、これも疑問である。講義内容以前に特別講演自体ができないような結果には絶対にならぬよう対策を講じておくのが、まさに "Work Preparation" である。学生・院生に特別講演を企画する前に大学側が模範を示せば、もっと説得力があるが、どうしてそこに気付かないのか不思議である。あるいはそうしたことは事務のすべき仕事ではないと考えて居るのではあるまいか。多分そうしたところかも知れない。

一般に今回のイベントに限らず、他の事業でも実施にあたっては、それなりの準備が必要である。筆者は国際学会などでの発表には、必ず PPT 資料が発表しようとしている最新のバージョンのものであるかなどを丹念に確認するようにして居る。講演発表に来て発表が成功裏にできないのは意味がないからである。それほど講演発表は重要なのである。発表の内容に問題が無くても、使用する機器がその機能を正常に作動させる環境に無ければ、これも意味はない。発表の途中で Technical problem と言うことで、プロジェクタのランプが切れたり、USB メモリを間違っただけを持ってきたり、機器操作者の誤操作などで進行が遅れが出たりする、などはあっては成らないことである。かつてはビデオもいくつかの方式があり、欧州や米国、アジアではマルチ方式のビデオ機器が無いと視聴できなかった。いまでこそ、そうした煩わしさは無くなったが、せつかく準備して臨んだ講演発表の貴重な機会に発表自体が不本意な結果に終わることは耐えられない。大きな構造物の代表例でもある「橋梁」などでも現地に運ぶ前に一度組み立てをして、確認をしてから現場に運ぶ。確認をせずに現場で組み立て始めたら、組み立てができない不具合が生じたというのでは金銭的にも時間的にも無駄が多く発生する。それを回避するために、わざわざ確認の工程が入っている。また現場に出来上がった構造物や製品を組み立てる場合に、設計製作した物に問題は無くても、それらをつり上げたり、移動するクレーンなどが不調で作動しない場合も同様である。そのような時にはあらかじめ日時を決めて再工事となる。そうした事を想定為て、余分にもう 1 台同じ大きさの機械を用意して待機させてある。その時に使わなくても、万が一その様な事態になっても、そうした問題を回避できる対応が必要である。そうした所までの配慮が無いと、想わぬところで多くの無駄を生み出すことになる。もちろん工事の規模が大きくなればなる程、不測の事態が生じた時の損害は大きいから、十分な準備と検討、注意が必要である。いずれにしても多くの聴衆を集めて見学、参加の機会を与えておきながら、そのイベントが実施できなかったという訳に

はいかない。万全の準備をして是が非でも終える必要がある。十分すぎるくらいの準備をして、どの様な事が起きても対応できる準備が必要である。講演者も、またそのイベントを成功裏に終えるためにはコーディネータ、機器、聴衆を含む関係者全てが整わないと無事に終了したと言えない。予めアンケートとPPT資料の配布も依頼してあったが、連絡した相手からは、休み中と言うことなのか返事は無かった事は既述した。当日になって資料の配付の手配をスタッフの一人にお願いしたという連絡が入った。いつものことではあるが、いずれ早晚配布するのであれば早めに配布しておいてくれれば不安材料の一つが消える。そうした配慮というか、考えが無いように言える。講義をはじめる前に、コーディネーターが予め学生の側の準備を確認してから講演者である筆者が紹介され、講演を始めるようにアレンジされていると言う事を、講演を始める10分ほど前に聞かされた。それも、そうした事で円滑に講義に入れられない事が生じてはならないと言う対応をしてあったからである。しかし講義を終えた後にコーディネータは現れず、どの様にイベントを終えて良いのか戸惑っていると、文字でアナウンスが入り「このイベントは企画側から打ち切られた」という。始めに成されたアレンジを考えると、終わるときも何某かの挨拶があって無事修了となると想っていたが、それはなく終わった。いささか拍子抜けの感が無いわけでは無かった。事前のうち合わせも無ければ、相談もないから「このような形での終わり」となる。早めに正確な情報が流されておれば、もう少し対応も楽しさを増したのではと少々惜しい感がする。しかし、まあまあこの程度であろうとの予測が最初から無かったわけではない。このような催しにおいても参加する学生は、この状況が「特別講演」の一般的進め方と理解し、疑問を挟まないで終わるのは悲しい。何もかも教育をつい維持手の学生へのサービスであり、その精神がないの出は意味がない。これが筆者が日頃から協調する「誰の為に、何の為にその事業を企画するのか」と言うことへの再考察への指摘である。目標、目的に向かって関係者が一致協力しないと、ミスが出たり進行に支障が出る。事業企画側の企画の精神に対する意識不十分差が不必要にレベルを下げる事になる。

当日の参加者は工学部の学部生ということで、講演に入る前の総人数は140名ほどであった。コーディネータの紹介の後に筆者が講義を始めた。参加学生の顔がカメラがオンになっている者に限り講演者からも確認できる。チョット違和感を感じたのはその中の女子学生の一人がカメラがオンになって居る前でいくつかの菓子(クッキー)か、何かを頬張りながら聴講している。普通一般の対面講義では教室の中での飲食のうちコカコーラや水などの「飲」は許されるであろうが、堂々とクッキーなどを口に入れる「食」については良いか悪いかの論議の前に「見苦しい、失礼だ、エチケットを知らない」という言葉が先に出る。オンライン講義となると、このような行為も可能であるが、講義を聴いているのか食べることに集中しているのか、見分けの付かぬ失礼な行為を見ようとは想わなかった。世代の違いと言えばそれまでだが、カメラをオフにして食するくらいの配慮があつて欲しい。これも大学ランキング評価にさえ影響する。どの様な教育をしているのか・・・と。

事前に配布を依頼したPPT資料とアンケートについては、何となく配布されていたらしく、講義の終わりにアンケートのいくらかが提出されてきた。早速目を通し、提出者には受け取った旨の返信を個々の提出者にした。迅速な対応がこのような場合にこそ必要であるからである。さもないと、現状のように提出は「いつでも良い」と判断し、そうした考えが主流になり、何時も期限を守らず、日常化するからである。学部生140名余が出席したことは確認したが、そのうち31名の早期のフィードバックがあり、その中の11名が大学院に進学希望と言うものであった。約1/3=30%が院への進学希望の割合である。この後、どの程度の学生が、アンケートの提出をしてくるかと考えて居るが、多分、筆者は尻切れトンボに終わり、大半は提出をせずに済ませるという結果になるのではないかと予想している。日頃から裏切られる事が多く、あまり信頼間がないから、残念ながらこのような事になる。

こうした事業への対応に於ける重要な事をここに記しておきたい。国際化に向けて英語の重要性が注目され始めた頃、筆者は自身が属する「科学英語」と言う科目を在職中に自身が所属する学科で担当していたが、独立行政法人化、競争的資金取得のためのプロジェクト応募などが必要になってきた。学部で英語教育の重要性が注目され始めたのもこの頃であるが、学務関係の委員会からの依頼（あるいは要請）もあって、挙手して「やっても良い」という意志表示をして実現したが、依頼側の委員会の対応は極めてそっけなく、言い出しっぺが全てヤルヤルと言うそっけない対応で、学生の履修申告や教室の手配も全く無く、人ごとのような失礼な対応であったことを記憶している。また実施中も委員会のメンバーの誰一人も見に来ることは無かった。そうしたあとの年度末に報告書の提出が必要なので書いてくれと言う。あまりにも失礼きわまる態度に、頑として断ったことを記憶しているが、別のところでしっぺ返しが来た。非協力的と言うことで何事にも「無視」と言う姿勢で居る。これは未だ委員会という組織での話しであるが、今回も似たような低次元の対応がいくつもあった。結論を言うと担当すべき事務の対応が余りにも、「自分は大学で働いてる、大学の職員である」と言う「自覚と誇り」のない事がこうした職員を作る結果になって居ると言うのが筆者の結論である。いわゆる仕事をしたくない、働きたくない公務員である。上記した今回の企画「特別講演」に際して依頼した資料の配付に対する対応について返事が来たのは特別講演実施の当日で、それまで4日ほど余裕はあったが休日と言うことで連絡は無し。この日は金曜日で休日でないから「依頼した本人も大学に来ていたが、直接口頭での連絡では無くラインでのメッセージを送信して済ませると言う対応である。事前の打ち合わせも何もない。しかも遠く離れた所にオフィスがあるのではない、「隣」の部屋である。窓ガラス越しに居る事も確認できるにもかかわらずである。

学部生への「特別講演」は終わった。翌日は大学院生が対象である。聞くところによると、聴講対象は院生ではあるが、就職をして居て週末しか大学に来れないと言う。いわゆる社会人入学と言うカテゴリの院生である。チェンマイ大学でも同様の講義を負担したことがあるが、外国人である筆者のような立場の場合は、かならず相手大学側のカウンタ・

パートとのシェアを必要とする。この体制は悪くはないが、カウンタ・パートにより自分の講義と比較されるのを嫌う場合が多く、書類上はともかく全面的に自分が負担するなどの対応にしないとうまくいかない。いろいろな理屈を付けて嫌われる事になる。チェンマイから移る時にも、同様の社会人院生への講義と言うことで回数を分けて負担を決めたが、結局は嫌われて、縁切れという結末となった。その理由は、社会人であるから彼らは週末にしか講義出席には来れない。しかし英語での講義では大多数が理解力に乏しく、もっと理解ができるタイ語での講義が望ましいと言うことであった。当初は英語での講義を歓迎し、受講学生にとっても英語は重要であるからと言う、積極的な理念などはどこかに行って、如何にも成るほどと想われる理由を事務のスタッフに言わせて、ひたすら切り離そうとする。講義の内容については触れず、英語に対する理解度の低さを強調しているところが、如何にも政治的(?)である。

さて、明日は院生を対象としたもう一つの「特別講演」というのに、隣の部屋に居るスタッフは一言も言わず17時過ぎに帰宅の途についた。万が一、明日の講義の実施がうまくいかなかった場合の事を案じて、かつての留学生(現在は教員)が講演開始の20分前に筆者のオフィスに来てくれた。その時分かったことは、そのスタッフ当人が、この日のコーディネータだと言う。またそのスタッフの上司にあたる教員も聴講すると言う。まさに驚きである。学部生と異なり、参加院生は20名程度と言う。定刻になる前に、マイクやカメラの点検、チェック、音量の調節などが要るが、スタッフがコーディネータであるのなら元留学生に来て貰う必要はない。なぜならそのスタッフは英語ができるからこそ筆者の事をこれまで世話する立場にあった(今でもその任務に変わりはない)からである。この事から、分かることは「この日は土曜日で休日であり、本人は出てきたくないのだが、上司からの命令でやむかたなく出てこなければならなくなった」のではないかと推察する。休日には休む権利があると言うのが、タイでの一般人の理解であるからである。特に事務職員、スタッフにはこの意識が強く、事の重要性より、自分の権利が優先する。「公務員が国を滅ぼす」とは、これまでもいくらか触れたが、今でもこの表現は此処では健在のようである。要約すれば「大学や学生などはどうでも良いのである。与えられた権利としての休日まで出勤して働く必要は無い、なぜ働かなくてはいけないのか」というのが常識なのであろう。確かにその通りであろうが、それではかたくなに拒否すれば良いのであるが、「上司の命令には逆らえない、ひょっとすると昇級に影響するのでは・・・との懸念が働いているからであろう。自らが勤務している組織で、「誇りや尊厳、自信」も持ち合わせず、いったい何を目標に働いているのか?と言うのが老兵(筆者)の素朴な疑問であるが、そうした別世界に住む人の生き方が大学の進展を邪魔、阻害している。それでいて大学の世界的ランキングがどうのこうのと言っている姿は滑稽以外の何物でも無い。公務員、またはこれに準ずる身分は一度取得すると容易に解雇されないから厄介である。要するにその人にとっては、大学も学生もどうでも良いのである。大学を良くしようなどと言う思いはさらさら微塵もないし、しかるべく報酬を貰えばそれで良い、と言う公務員

の典型（？）なのであろう。筆者には関係が無いから距離を置いて居るが、大学に対するイメージダウンは甚だしい。「まあいいか」、と言う程度に片付けるのがストレスを貯めない解消策かも知れない。

筆者の講演の後、スタッフの上司であり、大学院担当の教員が自ら自作したPPT資料を用いて15分程度の話をすると同時に、筆者の英語による講演内容を十分理解できない院生のためにタイ語で要約し、補足説明を加えた。筆者の講演がどの程度のインパクトを院生に与えたかは定かではないが、「頼むから、私を失望させないでくれ！」と必死に心に念じている。



図1 工学部学部院生を対象に特別講演参加者の学生諸君



図2 PCを前にZoomで特別講演をする筆者